

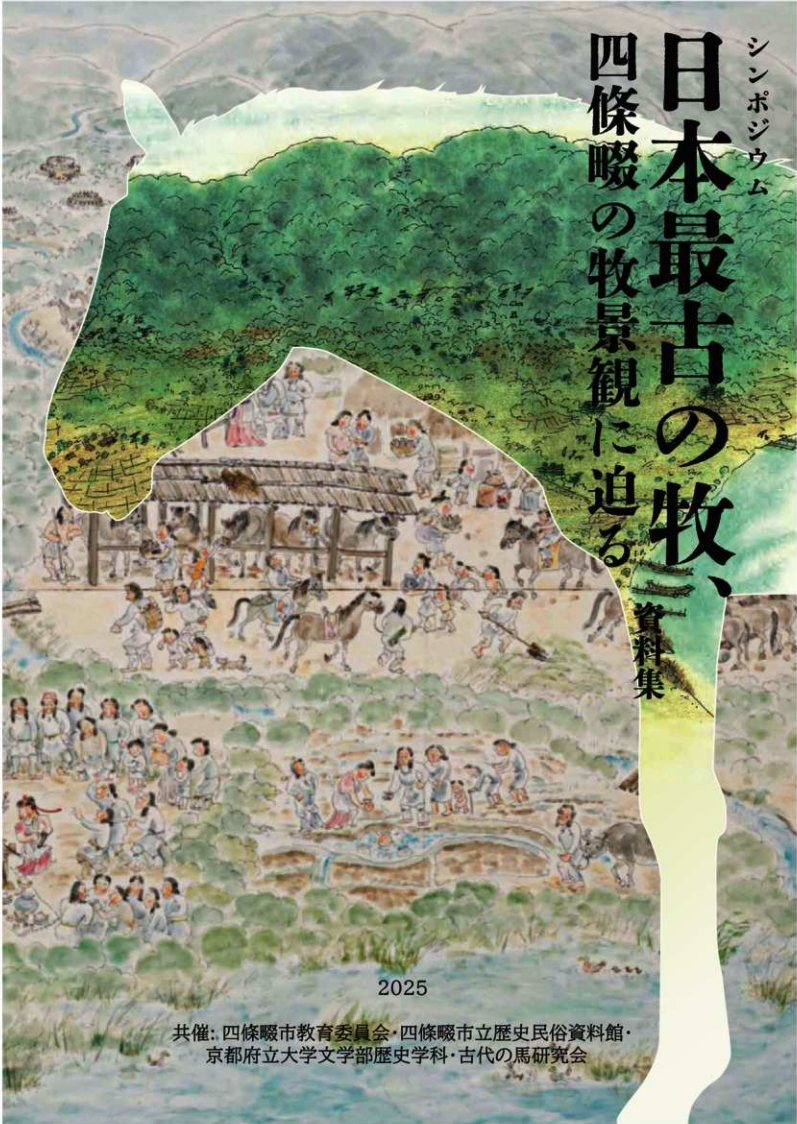
シンポジウム

日本最古の牧、 四條畷の牧景観に迫る

資料集

2025

共催: 四條畷市教育委員会・四條畷市立歴史民俗資料館・
京都府立大学文学部歴史学科・古代の馬研究会



シンポジウム

日本最古の牧、四條畷の牧景観に迫る

2025年1月25日(土)

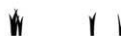
四條畷市市民総合センター展示ホール

プログラム

- 12:00 開場
- 13:00 開会あいさつ
- 13:10 宮崎泰史 (元大阪府教育委員会) 「葦屋北遺跡の調査を振り返る」
- 13:40 諫早直人 (京都府立大学) 「河内の牧と渡来人」
- 14:10 休憩
- 14:20 丸山真史 (東海大学) 「ウマ遺存体からみた河内湖北岸の牧」
- 14:50 實盛良彦 (四條畷市教育委員会) 「遺跡立地からみた河内湖北岸の牧」
- 15:20 菱田哲郎 (京都府立大学) 「5世紀の王権と河内湖北岸」
- 15:50 休憩
- 16:00 ディスカッション (司会:野島稔 (四條畷市立歴史民俗資料館))
- 16:50 閉会あいさつ



さらら馬飼の里 (佐野喜美画 2009年製作/栗山雅夫撮影)



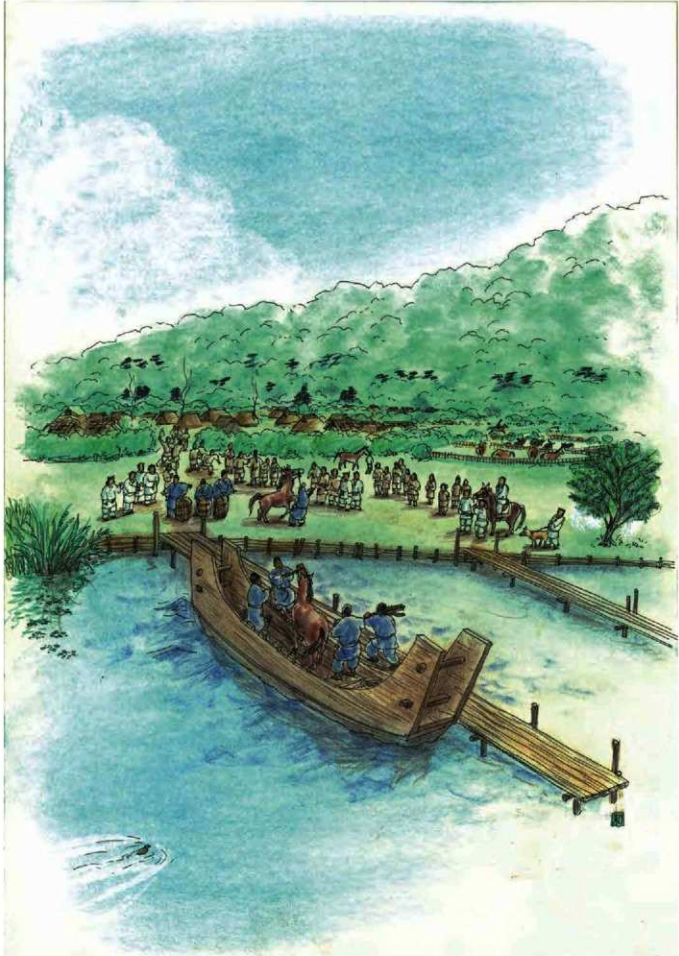
目次

プログラム	2
目次	3
カラー図版	4
「葎屋北遺跡の調査を振り返る」 宮崎泰史（元大阪府教育委員会）	8
「河内の牧と渡来人」 諫早直人（京都府立大学）	12
「ウマ遺存体からみた河内湖北岸の牧」 丸山真史（東海大学）	16
「遺跡立地からみた河内湖北岸の牧」 實盛良彦（四條畷市教育委員会）	20
「5世紀の王権と河内湖北岸」 菱田哲郎（京都府立大学）	24



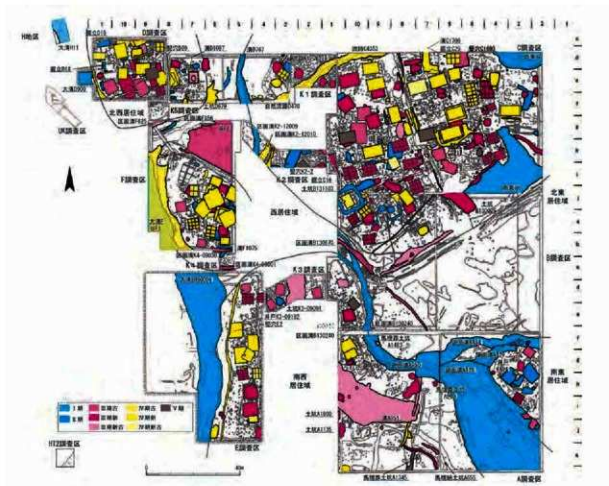
晩冬の讀良の牧（早川和子画 2022年製作）





初夏の部屋北集落（早川和子画 2022年製作）





葦屋北遺跡遺構図（宮崎泰史・松田篤作成）



葦屋北遺跡馬埋葬土坑A940（大阪府教育委員会提供）
『四條畷市史』第五巻より転載





奈良井遺跡の馬の祭り（佐野喜美画）



奈良井遺跡馬の祭り場

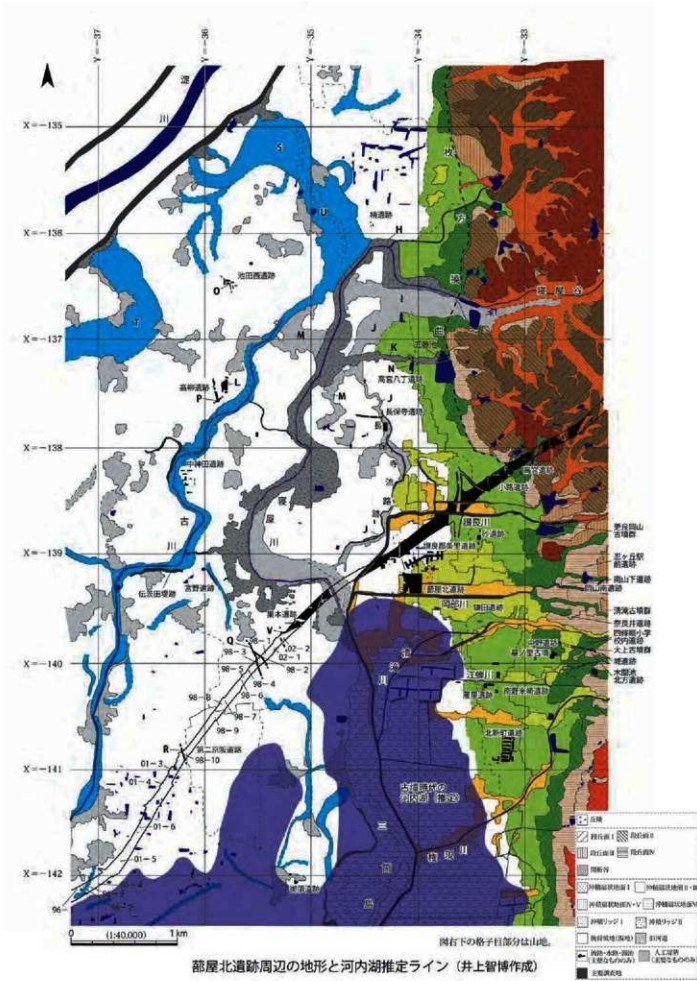


奈良井遺跡出土ウマ遺存体



奈良井遺跡出土木製ムチ・プラン





葎屋北遺跡の調査を振り返る

宮崎泰史

1. はじめに

葎屋北遺跡は、なわて水未来センター建設工事に伴う1999年の第1次試掘調査(当時は讀良郡条里遺跡)を契機として、2000年の第2次試掘調査で新規に発見された古墳時代中・後期の集落を中心とする複合遺跡です。

葎屋北遺跡の東方一帯、現在の大阪外環状線の東側は、以前から古墳時代中・後期の馬関連考古資料や渡来系考古資料の集中する特異な地域として注目されていましたが、葎屋北遺跡のある西方一帯は、河内湖岸が迫り、遺跡はほとんどなかったと考えられていました。そのような中、2000年の第2次試掘調査(試掘E)の土坑一括資料の発見には、調査を担当した私を含めて、関係者一同、大変驚いたことを鮮明に覚えています。

この土坑は、夥しい数の製塩土器(約76kg、推定1500個体)が覆うように堆積し、その下からは5世紀後半の多量の須恵器、土師器とともに鳥足文タタキメの認められる陶質土器や滑石製の双孔円板・白玉、砥石、移動式カマド、U字形板状土製品、馬歯等がみつかりました。陶質土器、U字形板状土製品と同様なものは韓国の南西部で見つかっており、葎屋北遺跡の成立に百済や馬韓地域との関りが指摘されました。とりわけU字形板状土製品は、発見当時、国内では破片が寝屋川市域で出土していたくらいで、用途についてはカマドに關係する付属品の可能性が考え



図1 葎屋北遺跡の位置(註1の図2転載)

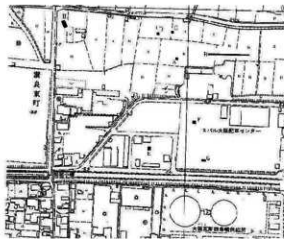


図2 葎屋北遺跡の試掘調査位置(註3)

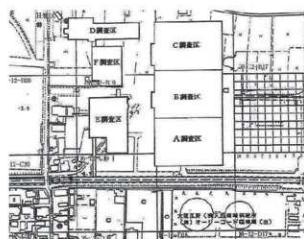


図3 葎屋北遺跡の調査区(註3)



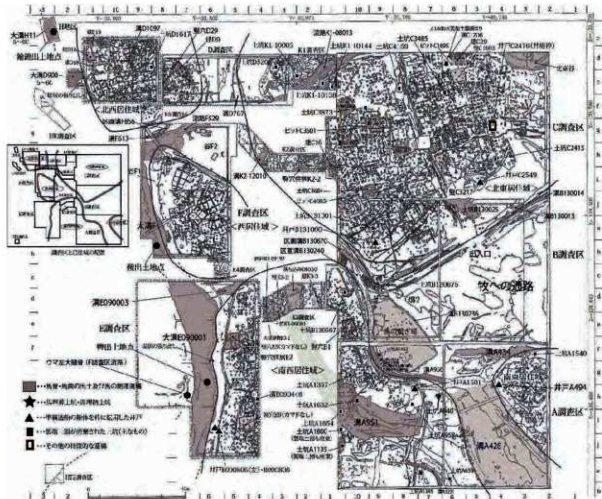


図4 薮屋北遺跡古墳時代中・後期遺構配置図(註2の図2を一部加筆転載)

られていました。この調査で初めて全体の形が明らかとなりました。平面をまずU字形の板状につくり、補強を兼ねて上下に凸帯を貼り付けた上で、焼成の際の便宜と使用時の移動等を考慮して、焼成前に中央を「相欠き」状に切り離してから焼成していたことも判明しました。その後、朝鮮半島の南西部から住居址のカマドの焚口前面からU字形板状土製品の先端が立った状態で出土したことで、焚口を飾る土製品であることが明らかとなりました。薮屋北遺跡の古墳時代集落を考えていく上、重要な発見であり、これらの資料を含めて、2001年から始まる本格的な調査によって、交易や牧場に関連した重要な施設の発見が大いに期待されることになったのです。

2. 調査成果

その後、本格的な発掘調査がおこなわれ、古墳時代中・後期の竪穴建物 73 棟、掘立柱建物 84 棟、井戸 27 基をはじめとする夥しい数の遺構と膨大な量の遺物が出土しました。平成 13 年(2001)の第 1 次調査(H 地区)では、集落を画する大溝を確認し、夥しい土器、木製品とともに騎乗用の馬具 3 点セットの一つである木製の輪轡 2 点が出土しています。続く平成 13 年(2001)の第 2 次調査(A 調査区)ではウマの頭部を埋納した土坑、井戸、溝や、ウマを埋葬した土坑 3 基(1 基は幼齢馬)、平成 14 年(2002)の第 3 次調査(C 調査区)では百済系の井桁組の井戸や馬小屋の





写真1 騎乗用馬具3点（大阪府教育委員会蔵） 大阪府指定有形文化財

可能性のある掘立柱建物、平成15年（2003）の第4次調査（B調査区）では集落の出入り口や牧への通路、ウマの繋ぎ場と考えられる施設、平成17年（2005）の第5次調査（D調査区）では馬小屋に付設する馬の肥溜めの可能性の考えられる施設、平成18年（2006）の第6次調査（E調査区）では木製の輪鍔が見つかった同じ大溝から鍔轡、平成19年（2007）の第7次調査（F調査区）でも同じ大溝から木製の鞍橋が見つかっています。一つの集落遺跡で騎乗に必要な馬具3点が見つかったのは初めての事です。また平成20年（2008）のB調査区とE調査区を結ぶK-3調査区では馬韓・百済系の大壁建物（平地住居）が発出されています。

3.まとめ

このように、葎屋北遺跡の調査で①幼齢馬を含む大量の馬歯・馬骨、②馬の埋葬土坑・埋納土坑、③実用的な初期馬具（木製の輪鍔・鞍橋、鍔轡）、④馬の飼育に関連する大量の製塩土器の出土、そして馬韓・百済系の大壁建物や、井桁組の井戸の存在、韓式系土器、U字形板状土製品（カマド焚口縁飾り）の出土は馬の生産、飼育の技術をもたらした人々の中に、朝鮮半島西部とのつながりが深い人々が関与していることが明らかとなり、古墳時代の馬匹生産の開始、展開を考えていく上で、欠かすことのできない遺跡の一つとなっています。

とくに、馬に関しては重要な発見がありました。木製の輪鍔と馬の全身骨格で、後者について古墳時代の馬の研究は金銅製や鉄製馬具などを中心となされてきましたが、良好な状態で



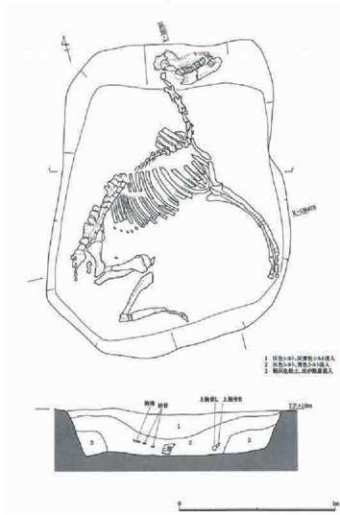


図3 馬埋葬土坑 A940 (註3)

見つかった馬の全身骨格の発見は、馬そのものを研究する上で重要な契機となりました。

木製輪鍔はそれまでも宮城県藤田新田遺跡や滋賀県神宮寺遺跡で出土が知られていましたが、古墳から出土しない木製ということで、あまり評価されていませんでした。そこで、出土品と同じカシ材で復元品を製作してみたところ、十分使用に耐えることがわかり、にわかに木製の馬具が注目されるようになったことを覚えています。

(註)

註1 丸山真史 2022「奈良県におけるウマ遺存体」『国家形成期の近畿地方における馬と塩の関係に関する基礎研究』、3～14頁

註2 岡田 賢 2014「大阪府四條畷市節屋北遺跡出土の馬骨とその性格について」『月刊考古学ジャーナル7』No. 658 ニューサイエンス社

註3 大阪府教育委員会 2010『節屋北遺跡1』大阪府埋蔵文化財調査報告第2009-3



河内の牧と渡来人

京都府立大学
諫早直人

1. はじめに

四周を海に囲まれた日本列島中央部（以下、日本列島）に、主として朝鮮半島南部から大量の家畜馬がもたらされ、定着したのは古墳時代中期、およそ5世紀を前後する時期のことです。以後、動力が機械化するまでの長い間、日本列島の歴史において、馬はヒト・モノ・情報を運ぶ陸上最速の交通手段でした。古墳時代は、その起点となった日本列島における畜力利用の開始期、導入期にあたります。今では高校日本史の教科書に載るほどあたり前となったこの事実は、戦後の日本考古学が明らかにした大きな成果の一つではないかと、私は常々思っています。

もちろん馬が自分たちの意思で海を渡ることはありません。また、家畜馬の飼育・利用は一朝一夕でできるものでもありません。ましてや繁殖・調教となると、現在でも極めて高度な専門的知識・技術を必要とします。古墳時代中期には馬だけでなく、渡来人などと総称されるたくさんの人々が海を越えて日本列島にやってきたと考えられていますが、彼ら・彼女らの中でも、とりわけ故地で家畜馬の飼育・利用に従事していた人々（渡来系馬飼集團）こそが、日本列島にそれまでいなかった馬という大型家畜動物の導入に決定的な役割を果たしたことは明らかです。

日本列島で最初に本格的な牧（河内の牧）が開いたエリアである河内湖北岸では、葦屋北遺跡をはじめとする大小さまざまな発掘調査を通じて、朝鮮半島などから馬とともに海を渡ってきた渡来人と、地元の、あるいは日本列島各地からやってきた倭人が集住雑居しながら、家畜馬生産をはじめとする各種生業に従事していたことが明らかとなっています（諫早編 2023 など）。本発表では、河内の牧と渡来人に関する研究の歩みを少しご紹介した上で、遺跡から出土する馬具に注目して、牧経営に従事した渡来系馬飼集團について、私の考えを述べてみたいと思います。

2. 家畜馬の出現と河内の牧周辺の渡来人

2000年に発見され、2001～2009年まで続いた葦屋北遺跡の発掘調査は、文献史料にはごくごく断片的な手がかりしかなく、もっぱら出土ウマ遺存体（馬歯骨）から推測するほかなかった河内の牧を具体的な遺跡・遺構にもとづいて議論する転換点となりました。この調査成果をいち早く取り入れた韓国の朴天秀氏は、葦屋北遺跡を含む生駒山麓に鳥足文土器などの「梁山江流域産土器」やY字形製カマド枠が密に分布することから、「近畿地域における牧が、梁山江流域からの渡来人によって成立」した可能性を提起しました（朴天秀 2005：634頁）。葦屋北遺跡の発掘成果やそれを受けた朴氏の仮説は、馬具研究に著しく偏っていた古墳時代の馬研究の閉塞感を打破し、家畜馬生産そのものと直接関わる遺跡・遺構を軸に据えた議論を惹起した画期的なもので、広く受け入れられてきましたが、馬関連考古資料と梁山江流域系（産）土器の遺跡レベルでの共存関係を依拠したこの仮説には、次の二つの課題を指摘することができます。一つは、梁山江流域を中心とする全羅南道一帯において、いつ、どのような経緯で家畜馬の飼育・利用が始まり、



どのように展開したのかという議論が欠如している点、もう一つは、日本列島における初期馬具を中心とする馬関連考古資料と、「榮山江流域産土器」の時期や系譜が一致しない点です。

朴氏が、5世紀末～6世紀後葉（TK47～TK43型式期）の所産とみた日本列島出土「榮山江流域産土器」の出現自体は、葦屋北遺跡周辺における大規模家畜馬生産が軌道に乗った5世紀前葉（河内湖北岸Ⅱ期）にまで遡ることが明らかとなっていますが（中野 2023 など）、この時期にもたらされた朝鮮半島系土器には馬蹄・百済系と新羅・加耶系が認められ、土器だけで馬飼集團の故地を一つに絞ら込むことは困難です。また、これまでに知られる馬関連考古資料による限り、榮山江流域における本格的な家畜馬飼育・利用は熊津期（475～538年）以降、葦屋北遺跡周辺よりも確実に遅れます（諫早 2019）。朝鮮半島南部で唯一、5世紀中葉以前に家畜馬飼育・利用の痕跡が認められない榮山江流域は、河内の牧の原郷候補から最初に脱落してしまうのです。

田中清美氏が葦屋北遺跡を「港湾機能を併せ持つ集落（津）」とみて、「倭王権の外交協力や交易の促進に力を発揮した通訳や航海術に優れた渡来人が居住していた」とみるように（田中 2012：589頁）、この地で渡来人に求められた知識・技術は、決して家畜馬の飼育・利用に留まるものではありませんでした。この地に榮山江流域からやってきた渡来人の目的や、この地で彼ら・彼女らに求められた役割は、家畜馬の飼育・利用以外に求めるべきというのが私の考えです。

3. 馬具からみた河内の牧の馬飼集團

古墳時代中期にやってきた馬飼集團の故地を推測するには、彼らが飼っていた馬（出土ウマ遺存体）やその飼育や利用に際して用いられた馬具などの道具に注目するのが何よりの近道です。前者については丸山真史氏の報告に譲ることとし、ここでは馬具に注目してみよう。葦屋北遺跡周辺からは、集落遺跡では珍しい馬具が複数遺跡で出土しています（図1）。とりわけ葦屋北遺跡は轡、鞍、鐙という現代乗馬に欠かせない馬具が一揃い出土した、古墳時代唯一の集落遺跡で、出土ウマ遺存体とともに葦屋北遺跡周辺に牧を想定する重要な根拠となってきました。

まず葦屋北遺跡大溝 E090001 出土鹿角製轡轡（図1-4）については、銜と引手の連結に遊環を用いることなどから百済製とみる見解もありますが、同時期（漢城期後半）の百済の銜は、ほぼすべて無振り技法ないし1條振り技法であるのに対し、葦屋北遺跡例の銜は2條振り技法とつくり方がまったく異なります。朝鮮半島南部においては2條振り技法銜に遊環が組み合うことは基本的にありませんので、百済製はもちろん、百済からの渡来馬具工人によって製作されたとも考えにくい資料です。葦屋北遺跡からは鉄滓、鞆羽口などの鍛冶関連遺物や、鹿角未成品などが出土しており、この轡は共存する環状鉄製品（図1-5）とともに同時期の百済の馬具製作を熟知している工人によって、葦屋北遺跡周辺で模倣製作された可能性が高いと考えています。

次は木製鞍です。葦屋北遺跡大溝 F からは後輪とみられる前後面黒漆塗りのトチノキ製鞍轡（図1-1）が出土しています。海部分と洲浜・磯部分の境界に幅0.7cmの突帯を削り出し、縁金具を表現するもので、左右2枚の板材を組み合わせてつくる金属装鞍轡を一本で模したものとみられます。モデルとなった金属装鞍轡（洲浜・磯一体鞍）の類例は、新羅や加耶の古墳から出土しており、日本列島の初期馬具にもみられます。この鞍の製作地を考える手がかりとなるのが用材選択（樹種）です。トチノキは、東日本を中心に分布する日本固有種で、葦屋北遺跡周辺でも縄文時代にはトチノキなどの落葉広葉樹の河畔林が広がっていたことが花粉分析によって明らかと



なっています。古墳時代の葭屋北遺跡周辺にトチノキが豊富に生えていたとは考えにくいですが、少なくとも朝鮮半島では入手しやすい材であることは確かです。つまりこの鞍は、日本列島在来の木工が慣れ親しんだ材でつくられているといえます。

最後は木製輪鍔です。葭屋北遺跡大溝 H11 (図 1-2・3) で出土した木製輪鍔は、いずれも一木を削り出したもので、その形態からみてタモ状に曲げた木心を鉄板で補強する木心輪鍔を模したものとみられます。モデルとなった柄部の短い木心輪鍔の類例は、新羅や加耶の古墳を中心に出土しており、日本列島の初期馬具にもみられます。ここで注目したいのはやはり用材選択です。いずれも硬くて丈夫なアカガシ亜属の材でつくられていました。アカガシ亜属は済州島や全羅南道にも分布するようですが、少なくとも朝鮮半島三国時代に木製品の材として積極的に利用された形跡は認められません。一方、日本列島においては弥生時代以来、農具などの木製品に多用されてきた樹種です。中国や朝鮮半島からはまだ木製輪鍔が出土していないこともふまえれば、鍔についても鞍と同じく在来の木工によって製作されたとみるのが自然でしょう。

以上のような出土馬具に対する分析結果と、葭屋北遺跡周辺で確認されている各種手工業生産の痕跡から、私は鉄製であれ木製であれ、騎乗に必要な基本的な馬具の製作・補修は、河内湖北岸において家畜馬生産開始当初からおこなわれていた可能性が高いと考えています。実用に耐える馬具の製作・補修にあたっては、馬をよく知る渡来馬具工人の関与が不可欠であったでしょうが、モデルとなった馬具の系譜は単系的に捉えられるものではありません。朝鮮半島南部の複数地域から馬具工人が渡来し(残念ながらその中に榮山江流域は含まれません)、在来の木工などと協業しながら、日本列島最初の牧の一角で、独自の馬具製作がおこなわれていたのです。

4. おわりに

集落遺跡出土朝鮮半島系土器に注目すると、この時期の近畿地方中央部にはいたるところに渡来人の痕跡を見つけることができます。しかしながら、河内湖北岸ほど馬の痕跡が濃密に見つかっているエリアはありません。家畜馬だけでなく、馬具工人を含む渡来系馬飼集団が複数地域から移住することで、倭王権藤下のこの地に日本列島最古の牧の一つが出現したことは確かでしょう。一方で河内湖北岸とほぼ同時期に牧が成立した可能性のある東日本内陸部の伊那谷では、馬関連考古資料に比して朝鮮半島系土器の出土は希薄です。この違いは何を意味するのでしょうか。日本列島における馬文化の急速な普及・定着に寄与した渡来人の役割は、どれほどのものだったのでしょうか。東アジア規模での比較研究を進め、いつの日か明らかにしたいと思っています。

主要参考文献(紙幅の関係で報告書は省略した)

- 諫早直人 2019「榮山江流域における馬匹生産の受容と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 217 集
- 諫早直人(編) 2023『牧の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺』六一書房
- 田中清美 2012「近畿の渡来人集落」『日韓集落の研究—弥生・古墳時代および無土器—三国時代—(最終報告書)』日韓集落研究会
- 中野 咲 2023「土器からみた河内湖北岸地域」『牧の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺』六一書房
- 朴天秀 2005「日本列島における 6 世紀代の榮山江流域産の土器が提起する諸問題」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室



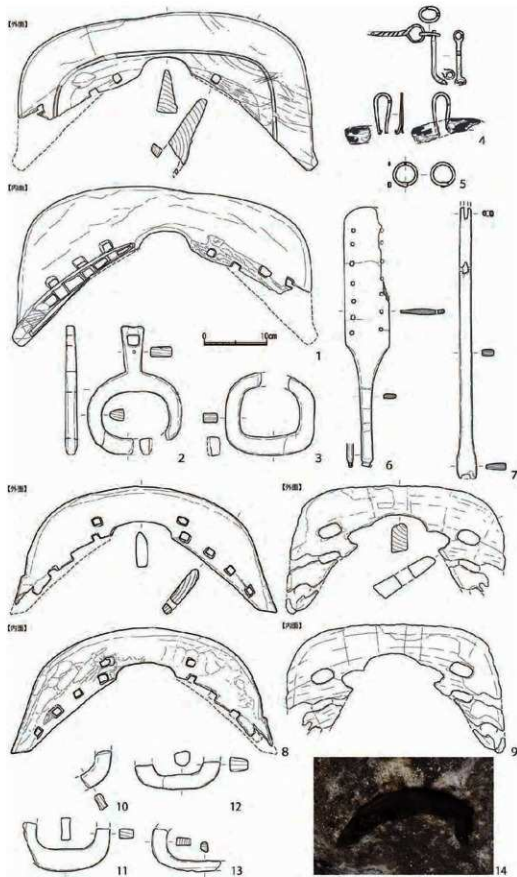


图 1 笹屋北遺跡周辺出土馬具(S=1/6)

1-5: 笹屋北遺跡 6-7: 奈良井遺跡 8-10-12: 讚良郡桑里遺跡 9: 長保寺遺跡 13-14: 鎌田遺跡



ウマ遺存体からみた河内湖北岸の牧

東海大学 人文学部
丸山 真史

1. 動物遺存体の研究からわかること

遺跡の発掘調査では、様々な遺物が出土します。そのなかには動物の骨や歯などの動物質の遺物もあります。このような遺跡から出土する動物質の遺物を「動物遺存体」と総称し、それらを専門的に分析・研究する「動物考古学」という分野があります。動物遺存体の研究は、その動物種について知ることはもちろんですが、その動物を利用した人間の生活を描き出すことが大きな目的となっています。

動物遺存体は、高燥地にある遺跡では火山灰に由来する酸性土壌や土中の微生物によって分解され、保存状態に恵まれません。日本では発掘調査が実施されている遺跡の多くは、この高燥地にあるため、動物遺存体が出土しないことが一般的です。しかし、貝塚、砂丘、洞穴などの遺跡は酸性土壌の影響が小さく、低湿地や水中の遺跡では微生物の活動が抑制され、動物遺存体は保存状態に恵まれる場合があります。

過去の人々が扱った動物遺存体の種類や骨格部位を特定し、それらに残された利用の痕跡を観察することで、人と動物の関係を読み解いていきます。動物種のそれぞれで特徴的な形の歯や骨を持っています（図1）。現生骨格標本の形を比較すれば、種類や部位が判明します。保存状態がよければ、雌雄、体高、死亡年齢も明らかにすることができます。近年では、歯のエナメル質の理化学分析によって食性や生育地の推定もできるようになってきました。

以下では、葦屋北遺跡で出土したウマ遺存体から、それらがどのようなウマであったのかを示し、ウマからみた日本最古の牧について紹介します。

2. 葦屋北遺跡のウマはどのようなウマか？

葦屋北遺跡のウマ遺存体は、それぞれが出土した遺構ないし遺物包含層で共存する土器群からみると、古墳時代中期から中世までの時期幅があります。しかし、これらの大部分は5世紀～6世紀のものであり、この時期にウマの利用が活発であったと言えます。安部みき子（2010）や宮崎泰史（2012, 2016）は、葦屋北遺跡のウマ遺存体の特徴を以下のように示している。

5世紀～6世紀では、破片数にして262点、最小個体数に換算すると30個体にのぼります。破片数、最小個体数のいずれかみても、5世紀から6世紀にかけて出土量が減少します。大部分は散乱状態で出土していますが、全身骨格部位が交連状態で出土した埋葬馬1個体、頭部の

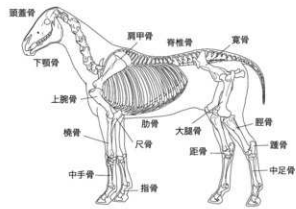


図1 ウマの骨格部位



みの埋納馬3個体が出土しています。頭部埋納馬のうち1個体は、下顎第2前臼歯に銜を使用した痕跡がみられることから、4〜5歳までに乗馬を目的とした調教が示唆されます。ウマの体格の目安になる体高は、110cm〜138cmの日本在来馬の小型馬や中型馬に相当する体格と推定され、なかでも御崎馬や木曾馬といった中型馬に相当する個体の方が多いこともわかりました。年齢構成は、2歳〜17歳と幼齢から老齢までの多様な個体があり、5世紀には幼齢・若齢個体が多数、6世紀は壮齢個体が多いという特徴があります。また、2歳以下の個体はみつかっておらず、2歳以下のウマの骨格は、骨化が不十分であるために保存状態に恵まれなかった、あるいは繁殖は別の場所で行われ、2歳頃から当遺跡での飼育がはじまった可能性が指摘されます。

さらに、どのようなウマいたのか、歯のエナメル質に含有する酸素、ストロンチウム（図2）、炭素の安定同位体分析を行いました。この分析は、ウマの生育地と移動、食性（採餌）の変化に関する情報を得ることができます。家畜であるウマの移動は人の移動とも関係しており、食性の変化は飼育や管理の方法と関係しており、考古学的な人間活動の解釈に重要な成果をもたらしま

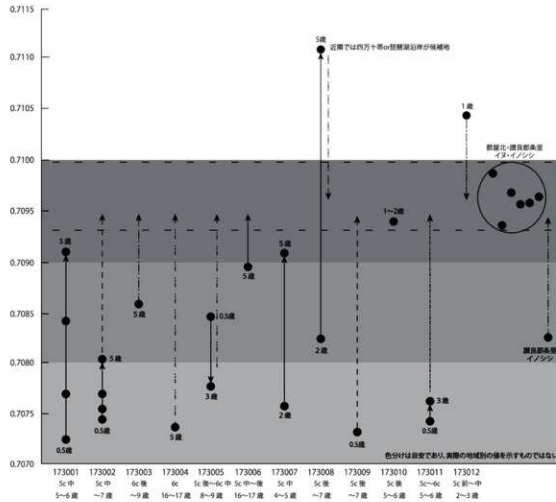


図2 ストロンチウム同位体比の分布

X軸は上からTG番号・時期・死亡年齢を示し、図中の年齢はその時の同位体比を示す。

す。今回は、薮屋北遺跡から出土した1点の切歯、11点の臼歯、計22点、12個体の測定試料を分析しました（文末写真参照）。また、ウマと比較するために、行動範囲が狭く



在地の値を示すことが予想されるイノシシの臼歯2点、イヌの臼歯2点の計4点、4個体の測定試料も分析しました。

分析の結果として、以下のことが明らかになりました。部屋北遺跡の近郊で出生、生育した可能性のある個体は2個体、別の場所で出生したと考えられる個体が5個体です。遺跡の近郊で出生、生育した個体のうちの1個体は全身が埋葬されたウマであり、雑穀を含む餌が与えられていたことも判明しました。これらのことは、5～6歳という若齢での死亡、前肢を伸展する特殊な埋葬姿勢であることから供犠の一形態として捉えることもできますが、部屋北遺跡で誕生して大切に育てたウマが若くして斃れ、集落内に葬った馬の墓であるとも考えられます。

生後まもなくは、部屋北遺跡とは別の場所にいたと考えられる5個体は、同じ場所ではなく西複数の地点で育成したものです。さらに、そのうち4個体は、出生地から部屋北遺跡に到来する間に、第3の地点を経由した可能性があり、移動とともに食性が変化しています。部屋北遺跡とは別の場所で誕生して一定の調教を済ませた後に、当地に連れてこられたと考えられます。成長して移動するとともに、雑穀を多めに摂取する食性に变化したことは、放牧が続けられていたのではなく、人間によって餌が与えられていたことを想定できます。

3. ウマからみた牧

部屋北遺跡のウマは、体格や年齢に多様性があり、複数の場所で出生、生育したものが集められていました。そのなかの墓に葬られた若いウマは、部屋北遺跡近郊で出生、生育したものでしたが、むしろ外部で生育したウマの方が多かったです。奈良県の南郷大東遺跡や布留遺跡、和歌山県の西庄遺跡、大阪府の長原遺跡では一定数のウマが東日本からもたらされており、王権の関与が指摘されています（青柳ほか2016、丸山2016）。部屋北遺跡には東日本で生育したウマはみられません。部屋北遺跡の5世紀のウマは幼齢・若齢個体が多いことを考え合わせると、働き盛りのウマを他所へ移動させたのではないのでしょうか。つまり、この牧は、各地からウマが連れて来られた集積地であり、必要に応じて外部へとウマを供給する役割を担っていたと考えられます。

参考文献

- 青柳泰介・覚張隆史・丸山真史 2016「南郷大東遺跡から出土した馬歯の化学分析」『書陵』第146号、奈良県立橿原考古学研究所
- 安部みき子 2010「部屋北遺跡出土の動物遺存体」『部屋北遺跡！』大阪府教育委員会
- 宮崎泰史 2012「家畜と牧場」『古墳時代の考古学』5時代を支えた生産と技術、一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編、同成社
- 宮崎泰史 2016「馬骨からみた部屋北遺跡の性格」『古代学研究』第208号、古代学研究会
- 丸山真史 2016「古墳時代の馬の普及と飼育・管理」『古代学研究』第208号、古代学研究会
- 丸山真史・覚張隆史 2023「部屋北遺跡出土ウマ遺存体の新発見」『牧の景観考古学』諫早直人編、六一書房





遺跡立地からみた河内湖北岸の牧

四條畷市教育委員会
實盛 良彦

1. 牧の要件と放牧地の認識

牧の構成要素①放牧地域、②繋飼地域、③管理・居住地域、④耕作地域、⑤墳墓・祭祀地域

※牧での放牧には自由放牧と限定放牧があった

- ・自由放牧：山野に放ち、区画は設けない。集落を囲い馬の侵入を防ぐ。主に秋から冬。
- ・限定放牧：1～2町（≒ha）の範囲の四方に囲いを設けその中で放牧。主に春から夏。

2. 遺跡の立地と牧の範囲

讀良地域（後の讀良郡域：寝屋川市の一部・四條畷市西部・大東市東部）において、馬骨・歯が出土した遺跡（図1）の分布は中部（四條畷市域）に集中。北部は長保寺流路（寝屋川の旧河道）沿いで馬具など出土。南部は馬歯や製塩土器が出土しても量が希薄。

→讀良の牧は讀良地域北・中部が中心

3. 遺跡立地から想定できる放牧地

讀良地域中部の遺跡立地（図2・3）

- ・讀良郡糸里遺跡周辺に1ha程の空白地（無遺構域）が複数存在
- ・雁屋遺跡周辺にも空白地（無遺構域）→弥生末に洪水被害のあった耕作に適さない土地
上記は限定放牧時の放牧地か

冬季を中心とした自由放牧時の放牧地は、低地部の耕地から高所部の山地まで、讀良川～権現川に囲まれた範囲の集落域以外すべてを利用。集落は溝や柵で区画して馬の侵入を防ぐ。

4. 遺跡立地からみた馬飼いの組織

讀良地域中部（四條畷市域）の馬飼いの集団には2つの組織

- ① 讀良川と岡部川に囲まれた地域を根拠とする集団
- ② 清滝川と権現川に囲まれた地域を根拠とする集団

※岡部川と清滝川に囲まれた地域は祭祀域を設けた両集団の共有地

古墳時代中期後半～末：両地域に30～40m規模の前方後円墳が並び立つ

古墳時代後期初頭：②に墳長70mの墓ノ堂古墳が造営（同時期としては北・中河内最大規模）

→中期末までそれぞれ指導者がいたのが、後期初頭に墓ノ堂古墳被葬者のもと結集

※『日本書紀』継体天皇即位前記の「河内馬飼首荒籠」の記述

※参考文献は下記論考を参照

實盛良彦 2023 「遺跡立地からみた放牧地—讀良遺跡群の馬飼い—」『牧の景観考古学』京都府立大学文学部。



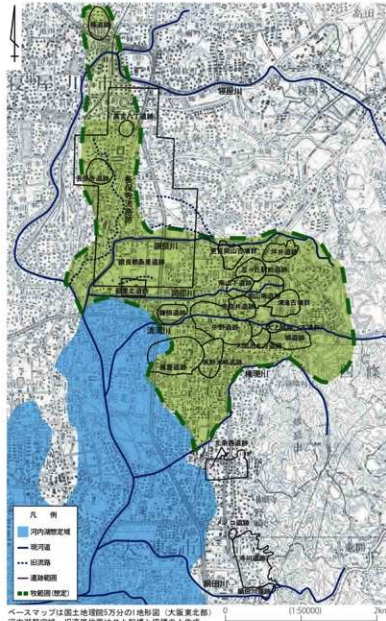


図1 讀良遺跡群の馬骨・歯出土遺跡



写真1 子馬形埴輪（忍ヶ丘駅前遺跡）



写真2 馬形埴輪（南山下遺跡）





図2 讚良遺跡群中部の遺構配置 (古墳時代中期)

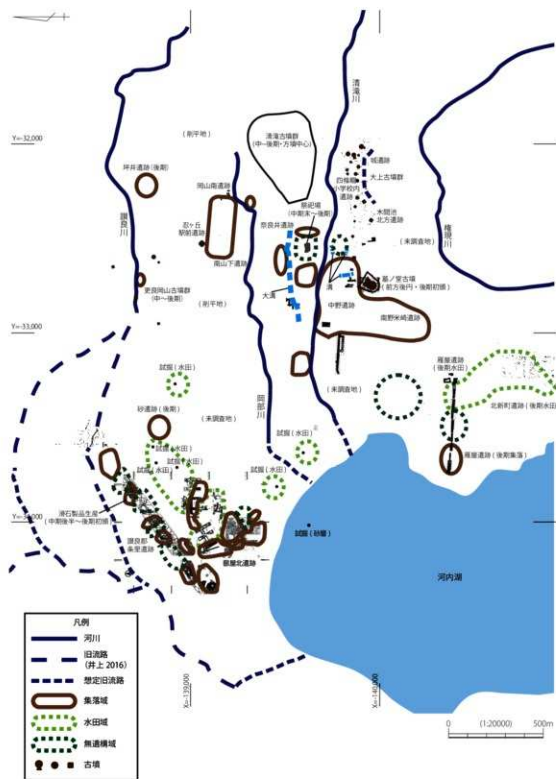


図3 讃良遺跡群中部の遺構配置図(古墳時代後期)

5世紀の王権と河内湖北岸

京都府立大学文学部 菱田哲郎

5世紀の王権は百舌鳥古市古墳群の成立に代表されるように、大和盆地から河内平野への進出があったと考えられ、その王陵の規模の大規模化が示すように、王権の力も増大したと推測される。その一端は、『古事記』や『日本書紀』の記述にも現れているが、その信憑性について考古学的な証拠から検討ができるようになっている。

四條畷市から寝屋川市にかけての河内湖北岸のエリアは、こうした王権の強化と決して無縁ではなく、開発の進展によって王権を支える必須の地になったと推測される。葦屋北遺跡に代表される牧についても王権との強い関係を示していることは疑いない。この地域の重要性について、5世紀の王権のもとでの位置づけとともに、交通に目を向けて検討することにしたい。

1. 5世紀の河内湖北岸の開発と王権

茨田屯倉の穀を筑紫に運ぶ 大王の指示と阿蘇君
5世紀の開発と茨田堤 「故堤」から 東側に糸里制＝水田 西側は？
掃部寮領大庭庄 『延喜式』の蔭の生産 茨田郡一百九十町
河内の湖岸の周辺 馬飼の遺跡 牧の設定へ 渡來人の活躍 秦氏
難波堀江の開発と茨田堤の築堤 河内湖の水位の低下を促した？

2. 5世紀の開発と王宮・王墓

手工業拠点の創出 須惠器生産＝陶器窯跡群 鍛冶＝交野と大巢
玉＝曾我 塩＝大阪湾岸～紀淡海峡 馬匹＝北河内
操業の継続性 王権膝下の生産地
王宮周辺の手工業 王宮の所在地＝地名から
難波宮周辺の5世紀代の遺跡 額田や宇治も →日下は？

3. 河内平野をめぐる交通路

水上交通 朝鮮半島・九州と畿内をつなぐ 淀川と河内湖岸の湊
陸上交通の重要性 馬の利用から 王権の拠点をつなぐ交通路の整備
北河内の主要交通路 東高野街道と南海道 清滝街道（行基道）
交通の結節点 中野遺跡 古墳時代・古代を通して一貫して中心地

【参考文献】

四條畷市史編纂委員会 2006『四條畷市史』第5巻（考古編）、四條畷市
西田敏秀 2009「北河内における前・中期首長墓の動向と王権」『北河内の古墳―前・中期古墳を中心に―、財団法人交野市文化財事業団
濱田延充 2007「北河内平野における遺跡の動態」『歴史シンポジウム資料 河内湾から肥沃な平野に―北河内平野の形成を考える―』、寝屋川市・寝屋川市教育委員会
菱田哲郎 2023「淀川左岸の開発と5世紀の王権―茨田堤を中心に―」『牧の景観考古学』、京都府立大学文学部



【史料】

史料1 『日本書紀』宣化天皇元年(536)五月辛丑朔条

詔して曰く。「食は天下の本なり。黄金万貫ありとも、飢を療すべからず。白玉千箱ありとも、何ぞ能く冷を救はん。夫れ筑紫の国は、遐迹の朝で届る所、去來の関門とする所なり。是を以て海表の国、海水を候いて賓を來け、天雲を望みて貢を奉る。胎中之帝より朕が身にいたるまで、穀稼を收藏し、儲粮を蓄積し、遥かに凶年に設け、厚く良客に饗す。国を安んずる方、更に此に過ぐるは無し。故、朕、阿蘇仍君未詳なりを遣わして、河内国の茨田郡の屯倉の穀を加へ運ばしむ。蘇我大臣稻目宿禰は、尾張連を遣わして尾張国の屯倉の穀を運ばしむべし。物部大連鹿鹿火は、新家連を遣わして新家屯倉の穀を運ばしむべし。阿倍臣は、伊賀臣を遣わして伊賀国の屯倉の穀を運ばしむべし。官家を那津之口に修造せよ。また其の筑紫・肥・豊三国の屯倉は、散れて懸隔に在り、運輸運かに阻たれり。もし須要とならば、以ちて率かに備へむこと難かるべし。また諸郡に課せて分け移せしめ、那津之口に聚め建てて、以て非常に備へ、永く民の命と為すべし。早く郡県に下し、朕が心を知らしめよ。」

史料2 『古事記』仁德天皇段

又秦人を役ちて、茨田堤及び茨田三宅を作らしむ。

史料3 『日本書紀』仁德天皇十一年四月条

群臣に詔して曰く、「今朕是国を視るは、郊沢、曠遠にして田圃少乏、且つ河水横逝し、流未駛かず。聊か霖雨に逢えば、海潮逆上して、巷里にて船に乗り、道路また泥となる。故、群臣と共に之を視るに、横源を決りて海に通し、逆流を塞ぎて田宅を全うせん。」

史料4 『日本書紀』仁德天皇十一年十月条

宮の北の郊原を掘りて、南水を引きて以て西海に入る。因りて以て其の水を号けて堀江と曰う。又将に北河之澗を防がんがため茨田堤を築く。是時、両処の築きても壞れて塞ぎ難きところあり。時に天皇の夢に、神有りて誨えて曰く。「武藏人強須、河内人茨田連杉子。杉子。此云高昌母能古。二人河伯を以て祭れ。必ず塞を獲ん。」(下略)

史料5 『日本書紀』仁德天皇十三年九月条

始めて茨田屯倉を立つ。因りて善米部を定む。

史料6 『延喜式』掃部寮

(略) 蔣沼一百九十町、河内国茨田郡に在り。刈り得る蔣一千圃、菅二百圃並刈り運ぶ夫、当国正税を以て雇役す。莞五百圃、撰津国篠夫刈り運ぶ。





図1 淀川左岸低地部の古墳時代中後期の遺跡と茨田堤の想定 (■集落 ●古墳)
 (背景は明治41年測図正式二万分一地形図「吹田」「星田」「茨木」「高槻」を40%縮小)

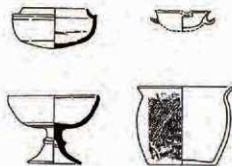


図2 桶遺跡出土遺物 (縮尺1/6)

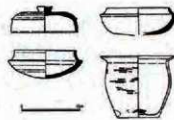
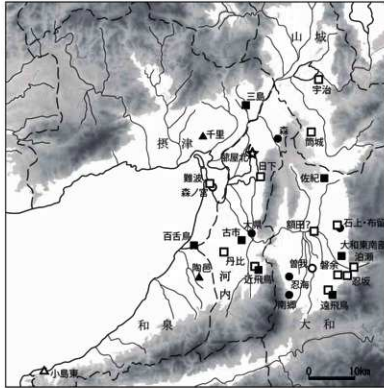


図3 伊加賀遺跡出土遺物



- 凡 例
- 鍛冶 ○ 玉作り
 - ▲ 窯業 △ 裂塩
 - ☆ 馬(牧)
 - 王宮 ■ 王墓

表2 宣化元年(529)に屯倉の殺を筑紫に選んだ時の体制

屯倉	実行者	指揮者
次田部屯倉	阿蘇君	朕(大王)
尾張田屯倉	尾張連	蘇我大臣(蘇我)
新家屯倉	新家連	物部大臣(蘇我)
伊賀田屯倉	伊賀臣	阿倍臣

図4 5世紀畿内の主要な手工業生産地と王宮・王墓

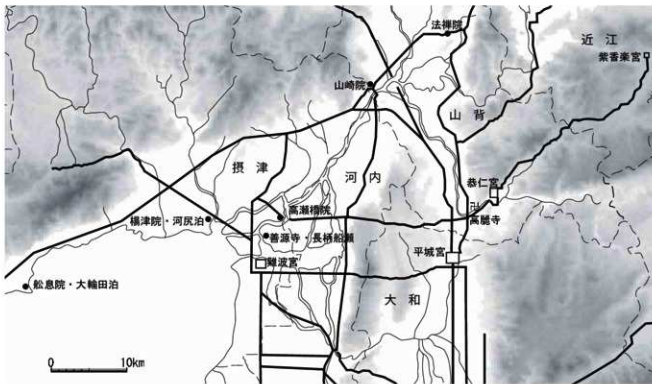


図5 行基のインフラ整備に関係する場所





シンポジウム 日本最古の牧、四條畷の牧景観に迫る 資料集

発行日 2025年1月25日



編集 四條畷市教育委員会
発行 四條畷市教育委員会・四條畷市立歴史民俗資料館・
京都府立大学文学部歴史学科・古代の馬研究会



表紙・チラシデザイン：京都府立大学 山内愛弓・岡崎社太（早川和子、佐野喜美のイラストをもとに作成）